

広域テフラ大阪層群アズキ火山灰の噴出源の決定

大阪層群のアズキ火山灰は中部九州の今市火砕流堆積物と対比され、偏西風によって東へ約500 km飛来した火山灰層であることが判明した。アズキ火山灰と今市火砕流堆積物の両者には、下位から上位へ珪長質から苦鉄質への系統的な組成変化が認められ、さらにアズキ火山灰の基底部の白色細粒火山灰層は今市火砕流の直下のプリニアン降下軽石層と対比された。このように、大規模火砕流の噴出に際して比較的短時間に大量の火山灰が飛来した場合には、給源火山の情報が、アズキ火山灰のように水底堆積した火山灰中にも残されうる(詳しくは本文32-38頁参照)。〈地質調査所 大阪地域地質センター 鎌田浩敏〉

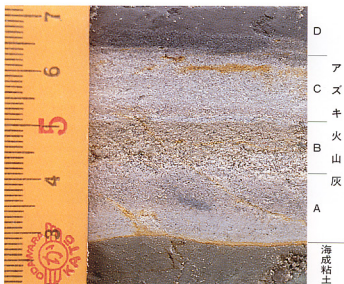


海
成
粘
土

E
アズキ
火山灰
D
ABC

海
成
粘
土

1. 大阪府和泉市のアズキ火山灰を構成する5つのユニット、ハカマと呼ばれる最下部の白色火山灰層は3つのユニット(A, B, C)に分かれる。その上の暗灰紫色の層がD層、さらに上の灰色の層がE層。C層とD層は色調の差による明瞭な境をもつ。D層とE層は生痕で乱されている。



D
ア
ズ
キ
火
山
灰
A

海
成
粘
土



2. アズキ火山灰の最下部の接写(スケールはcm)。A層は細粒砂サイズの火山灰、B層は粗粒砂サイズの火山灰と軽石、C層は細粒砂サイズの火山灰からなる。本文に述べるようにA, B層は今市プリニアン降下軽石の遠方堆積相に相当し、C, D, E層は今市火砕流の遠方堆積相に相当する。

3. 大分県野津原町籠ノ台に産する今市火砕流堆積物の強溶結相。灰白色の基質の中に黒色のガラス質レンズが見られる。厚さ10m以上の強溶結相の下位には非溶結相を挟んでプリニアン降下軽石層(厚さ5m)が見られる。